

編 集 後 記

今年は例年になく寒さが酷しく、雪も多いようですが、皆様には新しい年を迎えられて、あるいは学会をひかえて、ますます忙しく、張り切っておられることと存じます。世界学会に代表される昨年のように、今年も充実した年でありたいと思います。

本誌も 2 巻 2 号をお送りすることになり、地道な歩みを続けております。綜説は前号に続いて十二指腸潰瘍ですが、本号で終りとなります。まず十二指腸潰瘍の経過について八尾博士らのきわめて意欲的な論文、十二指腸潰瘍の手術について山岸博士らの幽門洞切除、選択的胃迷走神経切除合併術の紹介の論文、十二指腸潰瘍のレ線鑑別診断について熊倉博士の深い経験からの論文、さらに十二指腸潰瘍の内視鏡診断について田中博士らの独創的な研究の論文を飾ることができましたことを皆様とともに喜びたいと思います。さらに十二指腸潰瘍については、村上、青山両博士をはじめ新進気鋭の諸先生に御出席頂き、座談会を開くことができ、その記事を掲載しましたが、一般的、実地的な問題を主にしてありますので、前号と本号の綜説をよく読んで、参考にして頂ければ有難いと思います。次に症例では中沢博士らの胃結核、西沢博士らの多発早期胃癌の報告を頂きましたが、いろいろと啓蒙される点が多いと思います。技術解説は前号に続いて高木博士の胃生検をお願いしました。また昨秋大成功裡に終わった前号に引続いて第 3 回世界消化器病学会・第 1 回国際内視鏡学会の印象記も掲載しました。

< 増 田 久 之 >

< 編集 > 早期胃癌研究会